

日本語学習者のカタカナ語彙の習得に関する考察 ～台湾人日本語学習者への調査を通して～

戸川 美恵子
(育達科技大學)

0. はじめに

言語学習において、母語の知識を用いることは学習者のストラテジーの一部といえる。日本語学習において、漢字への依存度が高いことは漢字系日本語学習者によく見られる特徴であろう。筆者は台湾の大学で日本語教育に携わってきたが、漢字の知識をまったく援用できないという点で、カタカナ語りの習得は多くの台湾人日本語学習者にとって容易でないものと感じる。

国立国語研究所編(2006)には、外来語が日本社会に急速に流入している現状についての座談会記事が掲載されている。そこでは日本人が外国語(英語)を学習する際に外来語が邪魔になることが述べられているが、日本語学習者については触れられていない。当時は日本語を第2言語とする外国人の存在が、現在ほど意識されていなかったということかもしれない。しかし、筆者の教え子にかぎっても、ワーキングホリデーや(短期)留学、留学後の日本国内就職、企業の日本駐在員等により日本で生活する者は少なくない。

澎(2003:72f.)は「カタカナ表記の外来語は漢字圏の日本語学習者にとって苦手なものである」とし、カタカナ語に長音や促音が多いこと、カタカナ語の略語や複合語があることを理由のひとつに挙げている。また、日本語では外来語が和語・漢語と類義関係になるケースが見られることを指摘し、中国人の日本語学習者には微妙な違いが見分けにくいと述べている(同書:215)。

国立国語研究所(1990)は、英語を母語とする日本語学習者でもカタカナ語の習得が困難であると述べ、オーストラリアの学生が、元となった英単語からカタカナ語を復元する際に生じる多くの誤りを示している。ここから、学習者の母語によらず、カタカナ語の習得が困難なものであることが知られるが、本稿では台湾人日本語学習者の

カタカナ語の習得についてとりあげるものである。具体的には、筆者が行った台湾人日本語学習者への調査の結果を報告するとともに、台湾人日本語学習者のカタカナ語の習得について考察を加えたい。

1. 調査の概要

本稿では、中国語の単語を英語と日本語(カタカナ語)に訳す課題を行った結果を報告する。

1.1. 調査時期と対象

調査は台湾の大学の第2学期開学にあたる時期(2018年2～3月)に実施した。

調査の対象は、台湾の大学の応用日本語学科に在学する学生56名である。母語は全員が中国語(台湾では「國語」とする)だが、中国語と台湾語(閩南語、台湾では「台語」とする)とした者が10名、中国語と客家語とした者が3名いた。日本語学習歴は、平均2年11ヶ月(最大値6年5ヶ月、最小値8ヶ月、中央値3年)で、日本語能力試験の通過レベル(最上位のもの)はN1が1名、N2が12名、N3が10名、N4が4名、N5が8名、級なし(未受験や受験予定の者を含む)が21名である。

1.2. 調査方法

調査には小テスト形式の調査票を用いた(資料として末尾に添付)。調査票はA4サイズの両面印刷1枚とし、項目数は平時の小テストの分量に見合うように合計で30とした。調査対象の具体的な語は、日本語能力試験(JLPT)の出題基準にあるカタカナ語から配当レベル別に1・2級から各9語、3・4級から各6語を単純無作為に抽出した。

なお、調査票の作成に日本語能力試験の出題

基準を用いたのは、日本語能力試験が現在までほぼ唯一の標準日本語テストとなっているからである（特に、台湾ではその傾向がより強い）。2009年まで実施されていた方式（いわゆる旧試験）での出題基準によれば、1級200語・2級237語・3級43語・4級62語の計542語のカタカナ語が例示されている²⁾。なお、借用の出自を区別すれば、英語482語、フランス語19語、オランダ語17語、ドイツ語9語、ポルトガル語4語、イタリア語3語、ロシア語1語、（いわゆる）和製英語5語で、英語からの借用語となるものが全語数の88.9%である。一般に、英語からの借用語が外来語に占める比率は9割程度と言われているため、ほぼ標準的な比率と考えてよいであろう。

2. 調査の結果

調査の結果、正答率は表1のようであった。

表1. 英語とカタカナ語の平均正答率

	英語	カタカナ語
正答率	24.8%	29.1%
誤答率	19.3%	28.9%
空欄率	55.9%	42.0%

なお、調査にあたっては、自信がなくてもできるだけ答えを書くように指示したが、結果として空欄の回答が多かった。空欄は単語がまったく思いつかなかつたものと判断されるので、表1では「空欄」を誤答とは別に集計した。

表2. 調査対象者のJLPTレベル別の平均正答率

	英語	カタカナ語
N 1 (1)	23.3%	60.0%
N 2 (12)	25.3%	50.3%
N 3 (10)	29.7%	28.3%
N 4 (4)	30.8%	36.7%
N 5 (8)	25.4%	18.8%
なし (21)	21.1%	18.3%

レベルの後の () 内の数字は該当する人数を示す

表2は調査対象者を日本語能力試験の通過レベルによって分類した場合の正答率である（また、相関グラフを次ページ図1に示す）。N1レベルとN4レベルの標本数が少ないため、N1・N2レベルを上位、N3・N4を中位、N5および通過レベルなしを下位とすると表3のようになる。

表3. 調査対象者のレベル別の平均正答率

	英語	カタカナ語
上位	25.1%	51.0%
中位	30.0%	30.7%
下位	22.5%	18.4%

ここから、英語の正答率は日本語のレベルによらずおおよそ同じ程度であるが、カタカナ語の正答率は日本語レベルが上がるほど高くなっていることがわかる。

また、調査対象となる単語は日本語能力試験（旧試験）の出題基準から選定している（前述）。調査対象の単語の配当レベル別の正答率を表4に示す。

表4. 調査語のJLPTレベル別の平均正答率

	英語	カタカナ語
1級	12.9%	17.1%
2級	28.6%	31.9%
3級	25.6%	27.4%
4級	36.6%	44.3%

表5および表6（次ページ）は調査対象者のレベルと単語の配当レベルごとの正答率をクロス集計したものである。

表5. 表3・表4のクロス集計表（英語）

	1級	2級	3級	4級
上位	13.7%	23.9%	29.5%	39.7%
中位	16.7%	34.1%	32.1%	41.7%
下位	17.4%	28.0%	20.7%	32.8%

図1 調査対象者のレベル別にみた英語とカタカナ語の得点の相関

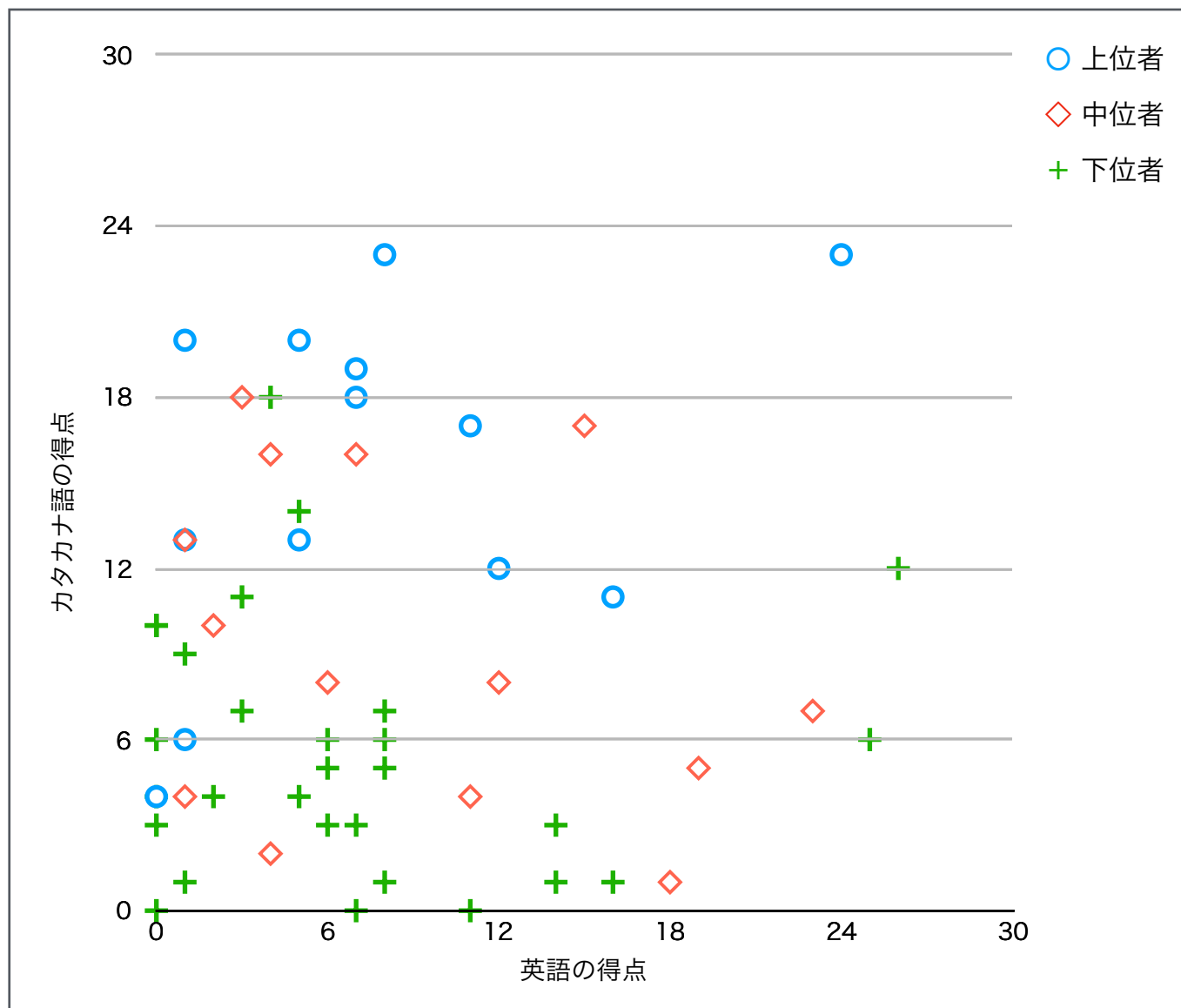


表6. 表3・表4のクロス集計表 (カタカナ語)

	1級	2級	3級	4級
上位	39.3%	61.5%	42.3%	61.5%
中位	14.3%	31.0%	35.7%	50.0%
下位	13.7%	19.2%	16.7%	33.9%

調査対象者の日本語能力試験の通過レベルと単語の日本語能力試験の配当レベルは、上位と下位の2級・3級の間が入れ替わっていることを除けば、ほぼ順当な正答率となっている。

本調査では、調査対象者に自分が使える言語をすべて回答するように求めた。そこで「英語」を回答に含めている者とその他の者との正答率を表7に示す。

表7. 「英語ができる」場合の平均正答率

	英語	カタカナ語
英語ができる	25.7%	28.3%
上記以外	18.3%	35.0%
全体	24.8%	29.1%

自分で『英語ができる』とした調査対象者は、英語の正答率が相対的に高かったが、逆に、カタカナ語の正答率は低いという結果になった。

ここまで、全体の正答率とグループごとの正答率を示してきたが、調査項目ごとの結果の一覧は、次ページ表8に示した通りである。なお、調査項目の番号は、資料として末尾に添付した調査票のものと対応している。

表8. 項目ごとの調査結果一覧

項目	英語			カタカナ語			
	正答	誤答	空欄	正答	誤答	空欄	
1級単語	1	6 (10.7%)	8 (14.3%)	42 (75%)	4 (7.1%)	17 (30.4%)	35 (62.5%)
	2	14 (25%)	9 (16.1%)	33 (58.9%)	34 (60.7%)	5 (8.9%)	17 (30.4%)
	4	7 (12.5%)	13 (23.2%)	36 (64.3%)	14 (25%)	11 (19.6%)	31 (55.4%)
	9	16 (28.6%)	11 (19.6%)	29 (51.8%)	6 (10.7%)	22 (39.3%)	28 (50%)
	14	5 (8.9%)	8 (14.3%)	43 (76.8%)	5 (8.9%)	9 (16.1%)	42 (75%)
	17	8 (14.3%)	11 (19.6%)	37 (66.1%)	4 (7.1%)	23 (41.1%)	29 (51.8%)
	18	6 (10.7%)	10 (17.9%)	40 (71.4%)	9 (16.1%)	9 (16.1%)	38 (67.9%)
	21	0 (0%)	4 (7.1%)	52 (92.9%)	8 (14.3%)	12 (21.4%)	36 (64.3%)
	28	3 (5.4%)	4 (7.1%)	49 (87.5%)	2 (3.6%)	12 (21.4%)	42 (75%)
2級単語	5	31 (55.4%)	5 (8.9%)	20 (35.7%)	15 (26.8%)	23 (41.1%)	18 (32.1%)
	6	11 (19.6%)	18 (32.1%)	27 (48.2%)	22 (39.3%)	21 (37.5%)	13 (23.2%)
	10	11 (19.6%)	17 (30.4%)	28 (50%)	27 (48.2%)	15 (26.8%)	14 (25%)
	15	4 (7.1%)	16 (28.6%)	36 (64.3%)	6 (10.7%)	19 (33.9%)	31 (55.4%)
	19	9 (16.1%)	17 (30.4%)	30 (53.6%)	20 (35.7%)	21 (37.5%)	15 (26.8%)
	22	44 (78.6%)	1 (1.8%)	11 (19.6%)	29 (51.8%)	15 (26.8%)	12 (21.4%)
	23	28 (50%)	9 (16.1%)	19 (33.9%)	20 (35.7%)	23 (41.1%)	13 (23.2%)
	25	3 (5.4%)	5 (8.9%)	48 (85.7%)	2 (3.6%)	4 (7.1%)	50 (89.3%)
	29	3 (5.4%)	18 (32.1%)	35 (62.5%)	20 (35.7%)	7 (12.5%)	29 (51.8%)
3級単語	7	16 (28.6%)	11 (19.6%)	29 (51.8%)	15 (26.8%)	25 (44.6%)	16 (28.6%)
	11	25 (44.6%)	13 (23.2%)	18 (32.1%)	15 (26.8%)	25 (44.6%)	16 (28.6%)
	20	16 (28.6%)	10 (17.9%)	30 (53.6%)	37 (66.1%)	6 (10.7%)	13 (23.2%)
	24	24 (42.9%)	7 (12.5%)	25 (44.6%)	18 (32.1%)	17 (30.4%)	21 (37.5%)
	26	1 (1.8%)	8 (14.3%)	47 (83.9%)	4 (7.1%)	13 (23.2%)	39 (69.6%)
	27	4 (7.1%)	12 (21.4%)	40 (71.4%)	3 (5.4%)	9 (16.1%)	44 (78.6%)
4級単語	3	15 (26.8%)	15 (26.8%)	26 (46.4%)	15 (26.8%)	26 (46.4%)	15 (26.8%)
	8	5 (8.9%)	22 (39.3%)	29 (51.8%)	29 (51.8%)	14 (25%)	13 (23.2%)
	12	34 (60.7%)	4 (7.1%)	18 (32.1%)	39 (69.6%)	9 (16.1%)	8 (14.3%)
	13	8 (14.3%)	12 (21.4%)	36 (64.3%)	17 (30.4%)	25 (44.6%)	14 (25%)
	16	33 (58.9%)	9 (16.1%)	14 (25%)	22 (39.3%)	23 (41.1%)	11 (19.6%)
	30	28 (50%)	17 (30.4%)	11 (19.6%)	27 (48.2%)	26 (46.4%)	3 (5.4%)

3. 調査に関する考察

ここでは、2章で示した調査結果からどのようなことが指摘できるか考えてみたい。

まず、何よりもカタカナ語の正答率が低いということが指摘できるだろう。調査対象者の日本語学習歴は平均して約3年と長く、大学進学前（高級中學）から日本語を学習している者も少なくない。今回の調査結果だけを見れば、特に空欄の比率が高いことから、調査対象者が全力を出していないのではないかと思われるかもしれない。これは授業外の調査であるため、学期成績に含まれないことから、調査対象者が手を抜いた可能性がまったくないとは言わない。しかし、調査にあたってはきちんと書くよう促したのであり、少なくとも筆者の観察では、彼らも真面目に書いたのである。にもかかわらず、正答は1/4程度に過ぎず、ほぼ半数が空欄であった。

また、中国語で示した単語をカタカナ語に訳すよう指示したにもかかわらず、中国語の単語をそのまま日本語とした回答（発動機、規則など）、日本語の漢語・和語に置き換えた回答（案内所、番組、受付、昼ご飯など）やそれらをカタカナ書きした回答が見られたことから、漢字系学習者にとってカタカナ語が難しいものであることをあらためて認識した。

次に、日本語の能力レベルと英語の正答率が比例しないことは、ある程度想定された結果である。台湾は世界一の親日国と言われるとおり、かねて日本語教育が盛んであり、学校にもよるが、中等教育から日本語のクラスが開講されている。また、これは以前から広く知られていることだが、台湾の大学の日本語学科に入学して日本語を専攻する学生の志望動機には、英語が苦手または嫌いだからという理由も大きい。そのため、日本語の能力レベルが上位にある学生が、逆に英語の正答率が低いことは特に驚くべきものではない。同じことは、表7で示した『英語ができる』調査対象者とそうでない調査対象者の正答率にも示されているものと思われる。

岡本（1997：106）は、中国語を母語とする学習者のカタカナ語語彙の習得においては、「①日本語のカタカナ表記初期認知→②英語での意味

理解→③母語英語化発音を基にした記憶→④日本語音化した記憶→⑤カタカナ表記定着」と記憶ステージが上がっていくとし、「優秀な学習者の外来語の記憶ステージは3段階で、①②を同時に行い、③が無く、すぐに④に移行し、④⑤を同時に行っている」と述べている。

今回の調査から見ても、優れた学習者が早くから外来語を外国語と区別し日本語として記憶していることは確かであろう。しかし、その背景には、優秀な学習者ほど英語に苦手意識（嫌悪感）を持っており、そのオルタナティブとして日本語を学習しているという動機が強いという事情があると考えている。

なお、調査対象とした単語の配当レベルと正答率の関係については、1級レベルの正答率が最も低く、4級レベルでは1級レベルの2.5倍ほどになっている。ただし、2級レベルの単語の正答率は3級レベルのものよりも高い。これは、単語の抽出比が約5.5%（30/542）であることから、結果として調査項目が偏った可能性も否定できない。この点については、項目を入れ替えた調査がさらに必要になるかもしれない。

最後に、今回の調査でのカタカナ語の誤答傾向を見れば、すでに多くのところで指摘されている長音の誤り・促音や撥音の誤り・清音と濁音の誤りだけでなく、カタカナとひらがなの交ぜ書きやカタカナの字形の誤り（崩れた字形や鏡文字）も見られた。学習歴から見てもカタカナが未習の者はいないはずだが、実際に正しく運用できないことは、作文などの授業で（漢字表記の類義語を用い）カタカナ語を使っていないからではないかと考えている。

4. まとめと今後の課題

本稿では、台湾人日本語学習者への調査を通して、カタカナ語彙の習得について考察した。その結果、以下のことが明らかになった。

まず、台湾人日本語学習者はカタカナ語を非常に苦手になっているということである。これは、漢字系学習者であることから、ある程度予測できたことではある。また、誤りの傾向もこれまで指摘されている通り、特殊拍や清濁などの音節レベル

のものがほとんどであった。しかし、無回答（空欄）を含めて、筆者の想定以上に得点が低く、今後、集中的な指導なりが必要だと考えている。

また、台湾人日本語学習者では、カタカナ語の得点よりも英語の得点がさらに低かった。これは、台湾での日本語学習の動機にも関わっていると思われる。日本語のテキストでは、外来語に原語を示しているものも少なくないが、原語の提示に指導上の有効性は低いものと思われる。

最後に、カタカナ語の誤りには表記上の基本的な誤りも少なくなかった。ひらがなとカタカナの交ぜ書きは、学習歴が5年近い学習者やN3に合格している複数の学習者にも見られた。ひとつには、中等教育段階から日本語学習を始めた場合、文字・表記の指導が十分になされないということがあるだろう。文法・文型や語法の指導、あるいは、わかりやすい学習目標として日本語能力試験（JLPT）の受験対策が優先され、書きことばの指導が追いついていない面があるものと思う。さらに、今回の調査でも見られたように、日本語の語彙として漢字表記の語を好むということもあるだろう。日本語のカタカナ語には類義語がある場合も多く、カタカナ語の使用を避けるために定着しない面があるのではないだろうか。

一方で、本稿の調査では不十分だったところもある。英語の能力については、調査票の得点から推定したもので、能力テストのグレードなどは調べなかった。調査項目の数が少ないため、調査した単語の性質に偏りがあった可能性もある。また、中国語（國語）に加えて台湾語や客家語を母語とする学習者が調査対象に含まれていた。いずれも中国語の方言とはみなされているが、標準的な中国語とは、互に通じないほどには異なっている。

彼らが中国語（＝國語）のみを母語とする学習者と異なる点があるか否かについては明らかにできなかった。これらの点は今後の課題としたい。

謝辞

本稿の作成にあたっては、別府大学文学部の内山和也先生にいくつかの貴重なアドバイスをいただいた。ここに記して感謝したい。

注

- 1) 本稿では、カタカナ表記の外来語をカタカナ語と称することにする。
- 2) ほかに、日本語だがカタカナ表記を通例とする「パチンコ」が1級に含まれる。

参考文献

- 岡本佐智子（1997）「外来語の習得ストラテジー：中国で学ぶ中国人研究者に見る外来語の中間言語（中国赴日留学生予備学校1995-96年度博士班初級日本語学習者から）」、『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』23, pp.97-109.
- 国際交流基金・財団法人日本国際教育協会編（2002）『日本語能力試験出題基準【改訂版】』凡人社.
- 国立国語研究所（1990）『外来語の形成とその教育』（日本語教育指導参考書16）大蔵省印刷局.
- 編（2006）『外来語と現代社会』（新「ことば」シリーズ19）国立国語研究所.
- 澎飛（2003）『外国人を悩ませる日本語から見た日本語の特徴：漢字と外来語編』凡人社.

(2018年3月22日受付、2018年3月31日再受付)

姓名_____

請將接下來的 1 到30個中文單字改為英文 (字母) 和日文 (片假名)。

	中文	英文	日文
例1	麵包	bread	パン
例2	旅館	hotel	ホテル
1	果凍		
2	規則		
3	吉他		
4	商業		
5	午餐		
6	護照		
7	三明治		
8	餐廳		
9	信息		
10	聖誕節		
11	超級市場		
12	電視		
13	電梯		
14	導覽書		
15	能源		
16	派對		
17	比賽		

	中文	英文	日文
18	頻道		
19	服務		
20	網球		
21	問卷調查		
22	遊戲		
23	冰淇淋		
24	玻璃		
25	發動機		
26	窗簾		
27	螢幕		
28	詢問處		
29	麥克風		
30	咖啡		

●你的母語是甚麼？ → _____

●請寫上所有你會的語言。 → _____

●你學了多長時間日語了？ → 大約學習 _____ 年 _____ 個月了。

●請在你所及格的日語能力級別上打圈。

N1 (1級) N2 (2級) N3 N4 (3級) N5 (4級)